



# 日本語教育ニュース

にほんご きょういく

若手日本語教師を10ヶ月間派遣～JENESYS 若手日本語教師派遣プログラム～

国際交流基金 さくらネットワークチーム 大伴 裕咲

JENESYS プログラムとは、日本政府が進める「21世紀東アジア青少年大交流計画」(Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths) のことで、アジア、オセアニア地域の高校生や大学生、教師、その他様々な分野で活躍する人々を日本に招いたり、日本の若者を派遣したりする大規模な交流事業です。国際交流基金はこの JENESYS プログラムに協力し、いくつかのプログラムを実施しています。今回はその中の一つ、「JENESYS 若手日本語教師派遣プログラム」について紹介します。

JENESYS 若手日本語教師派遣プログラムは、大学で日本語教育を専攻したり、日本語を教えた経験のある日本の若者を、東南アジアやオセアニア地域の日本語教育機関などに約10ヶ月間派遣するものです。現地の日本語教師と協力して日本語を教えたり、文化の紹介をしたり、日本に対する理解と興味をいっそう深めてもらうと同時に、日本の若者の国際理解を進めることを目的としています。

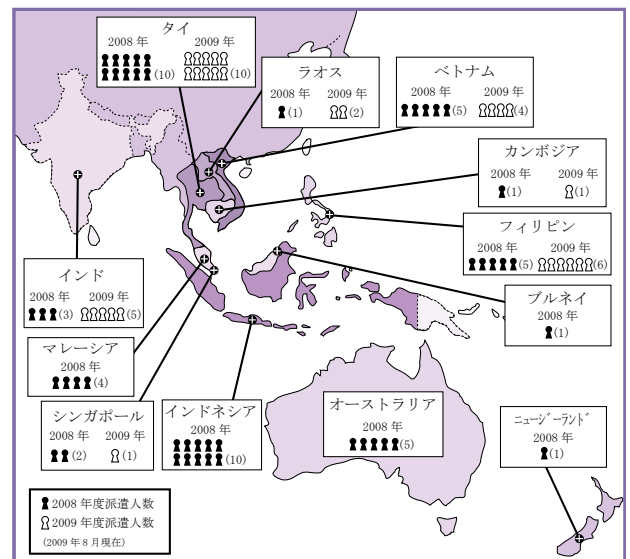
2008年度には48人の教師を派遣しました。今年度は、既に派遣した人も含め60人を派遣する予定です。

派遣される若手日本語教師は、多数の応募者の中から厳しい審査を経て選ばれます。そして、赴任の前には、日本語国際センター（浦和）で2週間の研修を受けることになっています。研修では現地の日本語教育事情の

ほか、海外における日本語教授法、文化学習の方法など、海外で日本語教育を行うために必要な知識と技術を身につけ、自らの役割に対する意識を高められるようにしています。日本語国際センターには、世界各国から大勢のノンネイティブ日本語教師が、研修を受けるために滞在しています。これらの教師から話を聞いたり、協力して日本語授業を計画する活動が研修に組み込まれているので、海外の教育現場の状況や、ノンネイティブ教師と協働で日本語教育にあたるということがどういうことなのか、情報を得たり体験することができます。たとえ派遣される国から来ている教師とめぐり会えなくても、派遣後のイメージが抱きやすくなっています。

また、それぞれの国へ派遣された後も、現地にある国際交流基金の海外事務所が、研修を行ったり相談にのるなど、若手日本語教師が現地で円滑に日本語教育にあたるよう支えています。

実際に、若手日本語教師として派遣された4人の方に、現地での活動や、現地の先生や生徒との交流について語ってもらいました。これからたくさんの交流が生まれることを期待しています。



## JENESYS 若手日本語教師派遣プログラムについて

外務省 HP: [http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc\\_koryu21/sdk\\_keikaku.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_koryu21/sdk_keikaku.html)

国際交流基金 HP: <http://www.jpj.go.jp/j/japanese/new/0905/05-01.html>

## 派遣国：フィリピン

派遣期間：2008年6月～2009年4月

氏名：長谷川 有彦

私は、フィリピン

・ミンダナオ島の  
ダバオに10ヶ月  
赴任しました。  
派遣先のミンダナオ



国際大学は、フィリピンの日本語教育をリードする教育機関で、派遣当初は、そこで学生とどのように向き合うか、自分の役割とは何かを模索する日々でした。

初めは、学生と良好な関係を保つことばかり考え、常に優しく接しようとしていました。しかし2ヶ月経った頃から、時には敢えて厳しく接するよう心掛けました。それは、同僚の日本語教師の方のある言葉がきっかけでした。

「教師は辞められても、先生は辞められない」私が教師という仕事を辞めたとしても、教えた学生にとって、私はずっと「先生」という存在であり続け、私が教えたことがずっと彼らの中に残っていくということです。この言葉を聞いて、たとえ短期の派遣教師でも、学生と真剣に向き合うべきだと考えるようになりました。学生にとっては大変だったかもしれませんが、派遣期間が終わる頃には、彼らの大きな成長を見届けることができ、また多くの学生から感謝され、別れを惜しまれました。

そんな学生たちに、人として大切なことを気づかされることもありました。

8月の終戦記念日に、1年生の授業で戦争のことについて話しました。フィリピンは、戦争で日本が占領し甚大な被害をもたらした国。やはり、日本人として過去の悲劇を忘れてはいけな思ったからです。その授業で、学生の一人が、「戦争のことを忘れてはいけなけれど…」と英語で言った後に、「私は日本が好きです」と、習ったばかりの日本語で言ってくれました。それは、私が日本語を教えているだけではなく、日本とフィリピンとの架け橋として教壇に立っていることを実感する瞬間でした。

経済的に豊かだとは言いがたいフィリピンでは、仕事やお金のために日本語を学ぶ学生も多く、日本から派遣されて日本語を教える私は、自分の仕事や立場に複雑な思いを持つこともありましたが、明るく前向きなフィリピンの学生との交流を通して、日本語教師のやりがいや再確認することができました。フィリピンで過ごした10ヶ月は、教師として、また人として、多くのことを学び、成長できた貴重な時間です。

## 派遣国：インド

派遣期間：2008年6月～2009年4月

氏名：池田 真希子

私は、インド

南東部、チェン  
ナイにある、  
在チェンナイ  
印日商工会議所



というところに赴任しました。学習者は中・高・大学生から、主婦、会社員、定年退職された60代の方とさまざまで、日本語に興味がある人や日本語をビジネスに活かしたいと考えている人など、皆やる気に満ち溢れていました。

そこで私が担当した業務は、現地の日本語教師の日本語トレーニング授業、学習者対象の授業、スピーチコンテストの指導、文化紹介等でした。私は、大学や専門学校の教壇実習などの経験を除いては教授経験がなく、自分が先生たちに授業をすることなどできるのか不安になりました。しかし、現地の先生が生の日本語に触れる機会がない現状を知り、また先生方の熱心な気持ちに動かされました。日本語の教師として必要なものを自分なりに考え、また先生方からの授業に対する要望や意見を取り入れ、試行錯誤しながら自由に授業をさせてもらいました。先生方から授業に対する要望ももらったとき、一瞬自分の授業が否定されているような気持ちになりましたが、言われた通りに変えて授業をしてみると面白いほど授業の反応がよくなりました。率直に意見してくれ、こちらもそれを受け入れる、そういうやりとりから信頼関係が築かれ、私自身も学び、成長することができたように思います。

インドは、気候・食事・言語・文化など、日本とまるで違って、慣れるまでは苦労もありました。しかし、赴任先の日本語の先生や学習者、現地の方々と交流する中で、インド人の温かさ、寛大さ、愉快さや素直さなどの素晴らしさを知り、チェンナイが大好きになりました。旅行やビジネスとは違った視点から、インド人と交流することができたことが本当に貴重な体験になったと思っています。

この10ヶ月が無事に終わることができたのも、国際交流基金を始め、ニューデリー事務所、チェンナイ総領事館や派遣先の方々のおかげであり、大変感謝しております。そして、より多くの方々にこのような素晴らしい機会が与えられることを願っております。



派遣国：マレーシア

派遣期間：2009年1月～(2009年11月予定)

氏名：五十嵐 裕佳

私の受入機関である  
Sekolah Tun Fatimah

は全寮制の中高一貫女子校です。ここで私は、選択必修の第二外国語の授業で日本語を選択した学生に対して、



二人の現地の日本語教師の方と一緒に日本語を教えています。

私が担当する授業は全てチームティーチングで行われるため、授業前に先生方と一緒に授業の流れや活動の内容、そして必要な教材などを打ち合わせてから、授業に臨みます。実際のクラス内では活動に応じて私が主で教えたり、先生の補助に回ったりと、お互いの利点を生かした授業を目標に授業を進めています。発音に注意しながらの新出語の導入や、会話を中心とした応用練習、日本文化を紹介する場面では、私が主となることが多いです。特に、日本文化を取り扱うことが多い5年生の授業では『エリンが挑戦！にほんごできます。』<sup>1</sup>を用いて、高校生の生活やファッションについて日本とマレーシアを比較する活動も行いました。その際に生きたりソースである私に対して、学生から多くの質問が投げかけられたことが、とても印象的でした。

また、通常授業のほかに、日本文化や日本語に関連した行事や活動も担当します。4月にマレーシアの高校生を対象にした「高校生日本語スピーチ大会」の際には、出場学生の原稿作成からスピーチの練習まで私が中心となって指導を行いました。この先も、マレーシア全土の全寮制中高一貫校で日本語を学ぶ学生が、さまざまな日本文化を体験する「日本文化の日」や、ジョホール・バルで行われる盆踊り大会にも、学生や先生方と一緒に、準備をして参加する予定です。そのほかにも、日本語選択の学生だけではなく、その他の学生や教員の方々にも、より日本について知ってもらおうと、簡単な日本語を紹介する掲示物を学校内に掲示したり、学校行事に浴衣を着て参加したりするといった活動も行っています。

私自身も学校生活を通じてマレー語やマレーシアの文化を学ぶことができるので、毎日がとても新鮮です。残りの派遣期間も、より充実した日々を学生と過ごすように、「教える」と「学ぶ」ことに取り組んでいこうと思います。

1 国際交流基金『エリンが挑戦！にほんごできます。』

派遣国：オーストラリア

派遣期間：2009年2月～(2009年12月予定)

氏名：永島 恭子

今年の2月から、ニューサウスウェールズ州教育訓練省に派遣され、現在フォートストリート高校と



日本語探検センターに日本語アシスタントとして配属されています。

日本語探検センターはニューサウスウェールズ州の教育訓練省が管理、運営する日本家屋の施設です。毎日各地から日本語を学んでいる生徒たちが探検センターを訪れ、様々なアクティビティを通して日本語を学んでいます。探検センターで実施しているアクティビティで使用する教材は、すべてスタッフが考案、作成したオリジナル教材です。私はここで週2回アシスタントをおこなうほか、少しずつですが教材開発の方にも関わらせていただいています。

もう一つの配属先、フォートストリート高校はシドニーの中心地からほど近いところに位置する公立の進学校です。日本語を含む外国語は、7、8年生(日本の中学1、2年生)は必修で、9年生から選択科目となります。12年生まで日本語を選択する生徒は、全員進学先を決めるHSC (Higher School Certificate) という卒業試験の受験科目に、日本語を選択しています。フォートストリート高校において、私はこのHSCで日本語を選択している12年生の試験対策を主におこなっています。

ここニューサウスウェールズ州の学校において、日本語は人気科目の一つです。しかし何年も日本語を勉強していても、ネイティブの日本語話者と話す機会がほとんどないという生徒は少なくありません。オーストラリア国内でもシドニーは特に移民が多く、街へ出ると様々な言語が聞こえてきます。もちろん多くの日本人もシドニーに滞在しています。そんなシドニーにおいても、新しい言語をいかにしてコミュニケーションの手段として学ばせるか、ということは大きな課題のようです。日本語探検センターでアシスタントをしていますが、現地の日本語の先生方の、生徒に少しでも生きた日本語にふれてほしいという思いが感じられます。

昨年まで地元福島の福島県でおこなっていた日本語指導とはずいぶん違うため、はじめはずいぶん戸惑いを感じていましたが、今は新たなチャレンジに、やりがいを感じる毎日です。